

# 伊都・橋本で進める、 観光を通じたまちづくり

橋本市地域おこし協力隊 上林直人 さん



上林直人さん

9月13日橋本市の高野山麓ツアーリズムビューロー事務所で開催された伊都・橋本地域の観光、まちづくりについて聞きました。聞き手は阪辻理事です。

阪辻：観光を通じた地域づくり、このテーマで、地域おこし協力隊員として、高野山麓ツアーリズムビューロー（以下「ビューロー」）の事業に関わっている上林さんにお話を聞きたいと思っています。最初にビューローについて、ご説明下さい。

上林：ビューローは2017年に設立された観光地域づくりの一般社団法人で、伊都・橋本地域等の高野山周辺に観光客を呼び込んで体験や観光を通じて地域にお金を落としてもらい、地域経済の活性化につなげていく目的でつくられました。設立にあたって高野山麓地域の有力な地元企業に出資してもらっています。

コロナ禍の前で、その頃は国を上げて観光で日本を活性化しようという国策としての流れがあったわけですが、また、大手旅行会社

既存の観光地に団体や個人旅行のツアーがあったのですが、今までの観光地でない地方でも観光を盛り上げていく、その受け皿となる組織が必要だということで、各地にDMO (Destination Management/Marketing Organization)、観光を地域で企画し統括する組織を作

って、観光客を受け入れる。そういう組織が日本各地で作られていた中で、高野山麓のエリアでも作られたという事です。設立時は私は赴任前なのですが、

阪辻：上林さんが取り組んでいる事業で、地域づくりという観点で代表的な事業について説明いただければと思うのですが。

## 地元の人が、地域の魅力を知る事が大事

上林：昨年かつらぎ町から観光プロモーション事業の委託を受けました。その中で、日本遺産の「葛城修験」の登録から一周年で、かつらぎ町内の日本遺産関連の史跡を知ってもらうために、修験道をテーマにした日帰りツアーを開催しました。一回目は丹生都比売神社、高野山とのかかわりが知られていますが、修験道とのかかわりもあります。もう一回は堀越

癒し、観音、住職にお話しいただいたり修験の道を歩いて経塚を参拝する。そういった取り組みを行いました。

修験とか日本遺産について、私もこつちに来て始めて知った内容で、調べてみるとすごく面白く興味深いと気づきました。実際に話を聞き、事業に携わる中で色々勉強になりました。今年度も同じく堀越癒し観音で親子向けのツアーを計画しています。昨年は高齢の参加者が多かったのですが、今回は若い世代の方に日本遺産を知っていただくという事で、子ども向けの修身体験をやる予定です。

阪辻：参加者は、地元とそれ以外で、どんな割合でしたか。  
上林：そうですね。告知は、和歌山全域とか大阪とか、新聞記事やチラシで告知しましたが、参加者は、地元半分。地元以外の県内や大阪、奈良半分という感覚です。

また、橋本市からの委託事業で、ワンコイン体験を昨年度開催しました。ワンコイン500円で紀州へら竿作りとか、ヘラブナ釣り、あるいはテディベア作り、高野山のごま豆腐や柿の葉寿司作りなど色々、この辺の「地域資源」の体験をしたのです。コロナという事で、橋本市と周辺エリアの人向けの開催でした。手軽な値段もあったので多くの人に参加して頂きました。特にへら竿作りとかヘラブナ釣りと

## 目次

伊都・橋本で進める、観光を通じたまちづくり 橋本市地域おこし協力隊 上林 直人さん……	1
シンポジウム ポストコロナの時代と観光を考える 日高圏域から起こす観光とまちづくり② ……………	3
県下各地から① 気候危機に対する取り組みを運動として始めるために かつらぎ町議会議員 東芝 弘明 ……………	8

**わかやま住民と自治**

発行／和歌山県地域・自治体問題研究所  
和歌山市太田2丁目14-9 太田ビル203号  
TEL・FAX 073-488-3127  
jichiken@crux.ocn.ne.jp 2022年 10月号



堀越癩観音 (日本遺産「葛城修験」)

ったという意見が結構寄せられたのです。

橋本とかこの辺の人は「この辺は何もないよ」「高野山に行ったら」みたいなことをよく言うのですが。謙虚な気持ちもあると思うのですが、でも、すごく魅力的な観光の要素、外から来た人にも誇れる事を知らない。地元の人をもっと自信を持っていいと思います。昨年テディベアは、修学旅行生とかが「橋本でこんな体験があるよ」とSNSで発信して注文が増えたと事業者の方が言っていました。そういう効果もあるので、地元の人こそ、地域の魅力を発信していくことが大事だと思います。私も外の目線で面白いものがある

るということを発信とか、そういうことのお手伝いができればと思っています。

### 個人の多様なニーズに応じて、地域から魅力的な人たちを発信

阪辻：「観光」の概念と言いますか、「観光」をどういう風に考えた方がいいのか、どうお考えでしょうか。

上林：学術的な定義には、全然明るくないので、個人の主観として話をさせていただきませう。昔は観光というと、有名な観光地を回って、名物を食べて有名な土産を買って帰るみたいな団体旅行が主だと思えます。

今は個人が中心、多様性の時代で、趣味だったり、本当に好きなものを選び、自分で、自分なりに楽しいことをするのが観光だと思おうのです。大きな観光地へ行くのも否定はしませんが、個人的には知らない街で、例えばへら竿の体験とか、昔ながらの街並みを見ているだけで楽しいという。その人なりの楽しい体験を色々用意する。それでいろいろな切り口でその町をPRすることが観光になると思えます。それが一つです。それと人の力が大事だと

思うのです。有名な神社仏閣でも一回行けば満足してしまいがちですが、面白い事をやっている人が旅先にいると会いに行きたくなる。人は一回会っただけでは満足できなくて、もっと知りたくなる。例えば、どこかの街で民宿に泊まって、その家族がすごく優しくしてくれたら、また会いに行きたくなる。そういう感覚は誰もが持っていると思うのです。そういう魅力的な人が多くいることが観光というか、外から人を呼ぶ事に関しては大事だと最近思い始めています。そこに関わってくる人の魅力をもっと発信していくとか、もちろん受け入れる側もおもてなしみたいな。そういうことも大事ですけど、人の魅力を伝えていくことも観光につながる最近思っています。

拡散し、一気に注文が殺到したりする。そういうことも起きていくわけで、いろんな媒体にいるような切り口でいろんな人に向けて、さっき言われたニーズを掴んで、そこに上手くはまるように、ピンポイントに情報を出していく。例えば高齢者の方ならテレビとか新聞。若い人ならSNSだったり、いろいろな切り口に合わせて発信をしていくことが大事だと思います。ただ私の今の活動も、ビュローという組織、橋本全体と言ってもいいかもしれませんが、なかなか外に向けて発信することができていないと感じています。

### 点を線へ、線を面へ広げて連携

阪辻：ポストコロナを見据えて、伊都・橋本地方の観光のことで、先ほど発信の事を言っていたのですが、他にも大事だと思えることがあれば。

上林：そうですね。コロナで外から人が来ない。高野山も大打撃だと聞いているのですが、さきほど言った地元向けのイベントなどをやっていく中で、受け入れる側の事業者さんとか市民の皆さんにも、観光ということが思ってくださいる方も着実に増

えていると思います。これから、もちろん外に向けて情報発信することも大事ですが、もう一方で、今までへらブナ釣りの方はへらブナ釣りで、パイル織物の人は織物関係と、それぞれの事業で点々で頑張ってきたらと思います。これからは、観光の受け入れができるという事を少しずつ認識していただいた事業者さんからも、連携というか町全体として、市民も入ってくると思うのですが、外から人を呼び寄せようという意識醸成をみんなでもってお互い連携していく。例えばへらブナ釣りの後は、温泉に入ってもらうとか、みかん狩りの後、町石道を歩いてもらう。そういう連携を、その中心になっていくのがビュローや橋本市、かつらぎ町の行政だと思おうのですが、そういったところが繋ぎ役となって、事業者や市民同士が受け皿を広くしていくような活動がこれから大事になってくると思っています。

阪辻：点を線へ、線を面へ、町全体で連携しながら、広域で言えば単独の自治体だけでなく、橋本市も伊都地方全体で連携していく必要がある。その中心を担うのが自治体であり、ビュローであるわけですね。ありがとうございました。



## シンポジウム

# ポストコロナの時代と観光を考える 日高圏域から起こす観光とまちづくり②

8月7日(日) 御坊中央公民館で開催したシンポジウムを2回に分けて報告しています。この号では、前号の報告を受けて後半の議論を紹介いたします。パネラーは狩谷晃司さん(御坊市商工振興課観光係長)、辻井修さん(紀州体験ゆめ倶楽部副理事長)、橋本美奈さん(元由良町地域おこし協力隊)、木戸地美也子さん(ウイズ・ア・スマイル会長)はコロナの影響で資料での参加となりました。コーディネーターは研究所理事の鈴木裕範さん(和歌山大学客員教授)です。

(文責 大前事務局長)

鈴木：議論するテーマは4つです。1つは、和歌山県の観光における、日高地域の位置、2つ目はコロナ禍収束後の新

しい観光について、3つ目は、つなぐ、つながるコミュニケーションのあり方を取り上げます。4つ目は、観光地として、日高圏域の今後の可能性と課題について話し合います。

### 日高圏域観光の現在地

最初に、狩谷さん、御坊市も含めて、日高圏域の観光の現状についてお話しいただけますか。

狩谷：県が出している観光動態調査のデータから、県全体で3543万人の観光客中で、日高都市は88万人と、かなり少ない状況で、大きな観光地がない。これが一番大きな要因と思っています。前段であったように、日高地方は和歌山県の海岸線の真ん中にあり

まして、高野山でも白浜でもここを拠点に日帰りで行ける有利な面もあって、毎年8月13日に日高港にパシフィックビーナスという客船が入港するのですが、オプションで、高野山や白浜ツアーを組んでいて、どっちも行けるっていうのは1つ、日高港に入ってきてくれる理由なのかと思っています。キャンプ場にして、大阪から2時間弱で来られる、串本に有名なキャンプ場があるのですが、そこへ行くよりも気軽に来れる。そういった、立地的に有利な面もあり、今後そういうことを生かしていきたいと思っています。

とところが体験の場合は、いろんなケースがあります。やったことに対する感動、また、体験を通じて地域の人の交流が生まれる。それによって次につながるのです。僕たちがやっている農家民泊の中で、いまだに多くの方がつながりを持っていきます。僕でしたら、マレーシアから来た中国系の女の子で5年ぐらい前に来て、去年結婚して今でもフェイスブックでつながっているのですが、コロナの状況で変わりましたが、8月に主人を連れて日本へ来る計画で、うちにも泊まる予定でした。これは日本の子どもでも同じだと思います。今までに東京の足立中学などの修学旅行を受けましたが、その子どももいまだにつながりを持っている方がいると思います。僕たちの観光は、体験することによって交流が生まれるのです。観光を充実させるには体験の項目をたくさんつくる必要があるわけですが、僕のところでは、つくっている野菜などの収穫体験など農業体験が主ですが、今、ゆめ倶楽部の企画部会は若い人が中心になって、SUPは取り組んでいます。SUPは

鈴木：位置的には好立地にあるが、大きな観光ポイント、核がないのが要因ではないかと。辻井さん、どうお考えですか。

辻井：私たちがやっている農家民泊、教育旅行誘致協議会の活動という観点からですが、先ほど見る観光から体験する観光に、観光が変わってきていると言いました。特にインバウンドの人たち、それから日本の旅行者にしても、見る観光では一度見るだけで二度見ようとは思わないのです。

シンポジウムパネラーからの報告



岸野酒造本家 (御坊市寺内町)

スタンドアップパドルボートの略で水に浮かべたボードに立ってパドルで移動する。最近増えてきているスポーツです。この日高地域は海に接して、マリンスポーツを使わないう手はないと思うのです。農業も御坊市内で、みかんの収穫体験や観光農園もあります。けれども、規模が小さいくバス2台、3台となれば収まらなくなる。今まで1軒だった農家体験を2軒、3軒と増やす必要があるのです。僕らの団体としては、そういうことが課題になっていて、体験の中身と種類を増やす。そして受ける数を増やすために軒数

を増やす。いろいろなことをおとして、日高地域の特徴を自分でつくっていく必要があるのではないのでしょうか。鈴木：潜在的な可能性も含め、自然条件や産物とか、こうしたものが十分生かされていない、もっと、地域特性を生かした観光メニューをつくっていくけば、観光客をこの地域に呼んでくることは十分考えられると。橋本さんは、由良に來られて、これまで地域の人が気づかなかつた由良の魅力を発掘してきたわけですが、日高地域の観光振興を図るために、どのようなことが必要か、企画や情報発信の仕掛けについて、お考えを聞かせてもらえますか。橋本：移住してきて、観光の話をするんな地域の有識者の方に伺ったときに、一番最初に言われることは、「何も無いのに何で来たの」と、この何も無いというワードが、どこに行っても耳にする。私からすると、こんなすばらしい場所なのにとこのを毎回説明するといふ経験がありました。他との比較などで相対的な日高の評価もあると思うの

ですが、日高にある絶対的なものというの間違ひなくあるもので、それを地域で活躍する方たちが、どう自信を持つて情報として外へ出せるかという経験だったり、成功体験だったりとかいう機会をつくっていけるのかどうか肝になると思います。鈴木：地元の人たちが、自分たちが住んでいる地域の価値を十分発見できていないのではないかと、もっと本当の価値に気がつく必要があるというお話だと思えます。木戸地さんが、こういうふうについて、昔は何もないところだ、面白いことがないところだとも思っていました。しかし、自身が行動をしたらときに意識が変わってきました。行動することで見えてくるものがありましたと言っていました。地元に住む人の意識の問題があります。

## ポストコロナと 観光を考える

次に、2つ目のテーマです。辻井さんの話の中に、これか

らのこの地域の観光を考えるうえで、示唆に富んだ指摘があったと思います。これからの観光は、地域の特徴、個性をもっと取り入れていく必要があるのじゃないか、豊かなメニューを用意できることが大事じゃないか。

辻井：今、御坊でオートキャンプ場が非常にはやつてると、たくさん人が来てくれる。それはいいのですが、そこでどまっていたらあかんと思うのですよ。コロナ状況下だから、オートキャンプ場はやる。印南町にゴルフ場が3つあるのですが、今ほとんど満杯です。コロナっていう特殊な条件の中で。例えばオートキャンプ場もその可能性は十分にあるのです。これは永遠に続くというふうに思わない方がいいと僕は思います。オートキャンプ場に来てくれる人たちにプラスアルファを与える必要があるのですよ。来た人たちが御坊市内に出て、あるいは日高地方で体験することにつなげていくことはできないのか、もっと積極的に先見的に、いろいろな対応を考えて行けばいいと思います。例えば、僕の知り合い

で、そめみち染物店が染物の体験をやっているのです。だけど、規模が小さく、精々10名までしかできない。しかし、御坊市内ではそめみちさんだけじゃないですよ、体験観光をやっている方は。体験というのは、結構面倒なものですよ。素人さんを仕事場の中に入れて、手順も考えて準備もしないとあかん。その割に実入りが大したことないのです。だけど、それをやることで、自分たちの仕事が広く知ってもらえて新たなつながりになるという気持ちがあれば、積極的にやれるのです。そんな体験メニュー。例えば御坊市内には金山寺味噌の工場がいっぱいあります。暖簾をずっと維持している老舗もいる。そこに体験や見学を入れられないのと、昔はお酒も作っていて建物は残っているのです。寺内町だけでも見られるところがいっぱいあります。その辺の開発をできないのかなど。市役所だけでは無理だと思ふので、商工会議所や、町の人の意見や力も借りてできないかと思います。そういうことをやれば、次のステップに進む準備ができるの





今年の御坊日高博覧会（おんぱく）※ホームページより

うのは、すぐく共感できる話です。

**鈴木：**もうひとつお聞きします。御坊日高地域には、民間で御博をやっていますね。

**狩谷：**御博は民間の方が中心にされて、御坊市は補助金を少し出しているだけなのですが、大変すばらしい取り組みだと思います。余り行政が関わらないからこそ、思い切った取り組み、いい意味で悪ふざけのようなこともさされています。大変面白いと思っています。行政が関わりすぎないで、それが故にできていることもあるのかなと思います。見守っています。

## 観光とコミュニティ

**鈴木：**狩谷さんは、地方創生総合戦略の作成の事業に長く関わってこられました。観光まちづくり、商工振興のまちづくりはどういう位置づけがされているのですか。

**狩谷：**はい。新しい人の流れをつくるということで、御坊市の魅力を発信して、御坊市のファンをつくることや、先ほどの私の説明の中の柱の中にもあった、市民の方にも観光をおして御坊市の魅力を知ってもらい愛着を持ってもらう。地方創生総合戦略は元々、人口減少の抑制というものですが、子どもの頃から御坊市に愛着を持ってもらって、ひいてはUターンであつたりにつなげていきたい。観光はそういう位置づけでの大きなところになります。

**鈴木：**いい観光地は、いいコミュニティがあります。住んでいる人が、住んでいるところに誇りとか自慢、愛着とか持てないところに、魅力的なふるさとと生まれなれないと考える

のですが、市民に対する、ふるさとを愛する運動、取り組みはもっとあってもいい気がします。

**鈴木：**地元足りないところは外部の力を借りていく必要がありますが、地域おこし協力隊は全国的にはかなりの数があるのだけでも、和歌山県内は少ない。日高圏域においても少ないと思うのですが、なぜこの地域にあまり来ないのか。

**橋本：**地域おこし協力隊にはポータルサイトがあり、そこに全国の募集情報が掲載されています。応募するひとがそのサイトから自治体を選ぶ時に近隣の都道府県が和歌山県や日高地域より魅力的な内容になっているとそこに人は集まってしまうと思います。

**辻井：**どういふところが違うのですか。

**橋本：**地域おこし協力隊には大きく2つの活動のかたちがあり、フリーミッション型とミッション型と呼ばれていきます。なんとなくふわつと良くしてください。という募集内容か、この地域でこの業種に従事してください。という限定的なものです。例えば、民泊を開業してください。とか、

移住に関わる業務をしてください。という内容です。応募する側が、自分がそこにいて何をすればいいのかが明確化されていることが大事です。

**鈴木：**3年間やって、そのあと、さようならだったならば、この仕事がない時代に、どうして生活していけますかと思うのです。橋本さんもそうですが、どう仕事をしたいかと思つたのではないのでしょうか。それでもポストコロナの大きな課題は、人口減少、少子高齢化、そしてこの国の仕組み自体が崩れていく、そういったことが明らかになってきているのが今度のコロナ問題です。制度としてその後を保証するようなことも考えないといけない。行政と住民と協力隊員が、この地域でこういうことをやっていくと共有できるミッションがあつて、うまく機能すると思つています。結果的に協力隊の皆さんにだけ頼るという方法は、早晩、限界が来ると思つたりします。

から、その方に合った仕事というふうな募集の仕方になつていまして、ちよつと今後は考えて、修正したいと思つています。

**結構ミスマッチというのが起ると聞いていますので、そういうことがないようにやっていきたい。**

**鈴木：**3年間やって、そのあと、さようならだったならば、この仕事がない時代に、どうして生活していけますかと思うのです。橋本さんもそうですが、どう仕事をしたいかと思つたのではないのでしょうか。それでもポストコロナの大きな課題は、人口減少、少子高齢化、そしてこの国の仕組み自体が崩れていく、そういったことが明らかになってきているのが今度のコロナ問題です。制度としてその後を保証するようなことも考えないといけない。行政と住民と協力隊員が、この地域でこういうことをやっていくと共有できるミッションがあつて、うまく機能すると思つています。結果的に協力隊の皆さんにだけ頼るという方法は、早晩、限界が来ると思つたりします。



由良町衣奈海岸

## 日高圏観光と広域観光

時間があとすこしになってきました。これまでの議論で、この地域の問題点も見えてきた気がします。地域資源を再評価し、それをどう生かすか。辻井さん、橋本さんから具体的に提案がありました。

最後に、この広域観光の可能性について、狩谷さんからまず聞きましょうか、

**狩谷：**広域観光は我々も非常に重要視していきまして、観光にはメリットしかないと思っています。先ほどの宮子姫の話でも、行政の枠を取っ払ってやることで、もっと魅力も高まりますし、また、キャンプ場も、和歌山県全体で今アウトドアを盛り上げようとしているのですが、ほかの競合するキャンプ場相手ではなくて、和歌山県全体がキャンプの聖地となっていけば、自ずと野口のキャンプ場も増えていくので、広域観光はどんどん推進していったらいいと思っています。今、担当者間でも、ラインとかSNSとかでも、情報共有もできますし、一昔前に比べたら随分、顔を合わす機会も多くなつて今後もし日高全体盛り上がってければと思います。

**鈴木：**橋本さんにお聞きします、女性を中心とした若い世代にどのよう情報を発信するか。

**橋本：**情報の収集は、現在はグーグルというよりは、インスタグラムとか、みんなに浸透しているアプリケーションになってきているので、その使い方や、フェイスブッ

クだったら40代から50代が中心、インスタグラムは20代から30代とか、それより若い世代はティックトックで情報収集をしているとか、その特性であつたりとか、ターゲットを絞ったときにどんなツールで何を発信するかという、軸になるもの、何となくしていればいいではなくて、どうしてそれをこのようにするのかというところまで、しっかりと落とし込んでから発信することを繰り返すと、ひまわりじゃないですけども、いいな、とかフォロワーが増える現象につながっていくと思います。

**鈴木：**ありがとうございます。人を動かす、情報戦略が大事だということかと思えます。木戸地さんから頂いているコメントを紹介しておきます。やっぱり地元に住んでいる人が、地元を愛する、大好きであることが大事。今後、つながりを広めるような、そういう地域づくりに関わりたいと言っています。無理をせずに、ゆるくつながる、そうすることで終わらないコミュニケーションができる。地域コミュニティをどう、より良いものにしていくのか、大事な視点です。辻井さん、これからの観光地域づくりを進めていく上で、提言があつたらと思えます。

**辻井：**僕の場合は、自身がやっている紀州体験交流ゆめ倶楽部の今取り組んでいることです。体験の数を増やす、種類を増やす、企画部会がやっている、今取りあえずはSUPを取り組んでいるのですけども、そういういろんな可能性を、若い人たちの感覚でもって考えてもらうことが重要かなと思うのです。僕らが3年前に、この日高郡全体で一本化しようという動きが出てきたときに、半年以上かけてワークショップでいろんな人の意見交換をしたのです。その中で共通している項目を選び出して、組織を一本にしていく方向性を見いだしてきたのですが、やっぱりワークショップというのは非常に重要なツールだと思うのです。高齢者や若い人。それから子育て世代のお母さんたちを入れて、できるかどうかでなく、やりたい、やってみたいことを挙げてもらって、そのいっぱい出てくる要求の中から可能なものを選んでいくことだと思っております。そういうことを行政自身で例えば各7市町でもって個別にやることも必要だし、7市町全体で1つにまとめたワークショップを取り組むような形があつてもいいと思うのです。だから、日高郡全体のものを考えるワークショップを、振興局さん辺りが呼びかけていただいたらできると思うので、その辺のところはどうでしょうか。

**鈴木：**狩谷さん、今日の議論を市役所の中で議論してもらえたらと思います。

コロナ以前の日常という言葉の方がよく言われますが、新しい日常を、生活をこれから考えていかないといけない。いずれにしても、日高圏域には、1つ1つの資源を見た場合に、優れたもの、ほかの地域にはないものがたくさんある、これを生かすことができて、つくり出すことができる、新しい観光の形があるのではないかと思います。そういうことを期待して、このディスプレイを終えさせていただきます。

県下各地から①

# 気候危機に対する取り組みを 運動として始めるために

かつらぎ町議会議員 東芝弘明

県下各地の運動や話題などの報告をお願いします。伊都地域からの報告です。

今年の夏は暑かった。

気象庁によると、6月下旬の平均気温平年差において、東日本と西日本では、ともに1946年の統計開始以来1位を記録し、猛暑日や真夏日についても、観測史上最も高い気温を記録した。異常気象の原因の一つが亜熱帯ジェット気流の蛇行にあり、さらに



金剛の滝小水力発電所 (かつらぎ町花園)



東芝弘明さん

寒帯前線ジェット気流の持続的で大きな蛇行も関係したのだという。

一説によると温暖化によって北極圏の氷が溶ければ、北極圏でジェット気流が正常に生成できず、地球に干ばつや洪水、大寒波や異常な高温が頻繁に起こるようになるらしい。

気候危機は深刻だが、日本政府の対応は良くない。日本は昨年10月、第6次計画を閣議決定し、2015年策定の第5次計画を変更した。しかし、この計画が示した目

標は、同年11月に開かれたCOP26(国連気候変動枠組条約第26回締約国会議)で目標となった、1.5℃以内に地球の平均気温上昇をおさえるというものには全く届かないものだった。この食い違いは極めて大きい。

## かつらぎ町の実施計画は積極的な目標を

かつらぎ町は、2022年度に地球温暖化対策として、地方公共団体実行計画(事務事業編と区域施策編)を立てようとしていた。花園地域で有田川を活用した小水力発電を実現し、さらにバイオマス発電にも取り組もうとしている関係で実行計画の作成が日程に上ってきていたからだ。

先行する各自治体の実行計画は、国の考え方に従ったものなので、ほとんど実態を變えられなかったり、現状での努力を把握するものだけのものが多い。私は、作成される計画がそうならないよう重視し一般質問を準備した。

3月議会では「国の方針に基づいて、市町村の気候危機対策の計画を策定すべきではない。当面の焦点となる2030年までにCO2を60%程度削減する必要がある」こと

を訴えた。論理には根拠が必要になる。政府方針がどうして国際基準に達していないのかを明らかにしないと説得力が出ない。如何にして説得力のある資料を提示し、コンパクトに説明するか。質問ではここに力点をおいた。

日本におけるCO2がどの分野で排出されているかという点も重視した。地方自治体の気候危機対策が、日本国内でどういう位置を占めるのかそのことを知った上で計画を立てないと全体と部分の関係が見えなくなる。

## 公共施設のゼロエネルギー化、住宅の省エネルギー化の推進を

ただし、これだけでは自治体の計画は具体的ににならない。具体論としては、自治体としてゼロエネルギーハウスやビルディングを目指すべきだということを図表で明らかにし、それはそんなに難しい課題ではないことを強調して、新しい公共施設のあるべき姿を示した。その上に立って、個人の住宅については、リフォーム助成としてアルミサッシの二重窓化を提案した。これが実現すると電気の使用量を40

## 地産地消の電力会社を住民とつくる

6月議会では、小さな地産地消の電気会社を自治体と住民でつくるとういうことも提案した。これは和歌山大学の客員教授である和田武氏の講演を土台にしたものだった。

気候危機対策は、資本主義の「生産力」が環境を破壊している問題であって、人類の文明の生産力が、絶対的な力をもって環境を破壊しているということではない。文明の力が環境破壊に直結しているというのであれば、人類の存在そのものが地球にとって害悪になる。資本主義の飽くなき利潤の追求の下で生じている危機が、気候危機の本当の姿なので、生産力を江戸時代に戻せとか、人口を極端に減らせということではなくて、社会を発展させながら気候危機を克服するという明るい展望のある課題だと思っている。未来は明るい。住宅リフォーム助成やエネルギーの地産地消が実現すれば、地域に産業も起こってくる。全体の状況を把握しながら、自治体に何ができるのか。そう考えればワクワクしてくる。

%ほど削減できる。